5. 創立３０周年に寄せて

千環協『30 周年記念誌』に寄せて

㈱新日化環境エンジニアリング
荒牧寿弘

私が千環協・企画委員長を拝命していたのは平成 12～13 年度の 2 年間です。企画委員会の仕事は研修見学会とパネルディスカッション･技術講演会の企画運営が主であり、これは現在も同じだと思います。当時は岡﨑さん（現日本環境測定分析協会）が副会長で企画委員会の指南役でした。その庇護の下、理事の中でも最も恵まれたポジションでしたので申し訳ない思いをしていました。それが、あろうことか去る 7 月に開催されました千環協 30 周年記念式典において､おこがましくも功労者として表彰を受けてしまいました。その理由に心当たりがありませんが、紙面をお借りして少し回顧してみたいと思います。

最初の研修見学会は、平成 12 年 7 月 14 日に電力中央研究所（我孫子市)、清水公園（野田市)、ニッカウヰスキー（柏市）を貸切バスで回りました。電中研は岡﨑さん、清水公園でのバーベキュー大会はキッコーマンの川村さん（理事)、ニッカウヰスキーは安村さん（会員）のコネで見学予約が成立し、豪華な貸切バスも岡﨑さんのルートで格安で利用することができました。私はただ下見に行ってマンズワインをお土産にいただいてきただけです。これでは申し訳ないので技術講演会では私の知人であるＭ氏（帝京平成大学教授）にお願いして「化学汚染と人間の歴史」をテーマとする講演を内定していました。ところが、直前になって脳梗塞に倒れられたため、急遽Ｋ氏（北九州市立大学教授、当時新日鐵総合技術センター）に「鉄鋼業における環境問題」と題する講演を要請し事なきを得ました。そのＫ氏も肺ガンを患って本年 5 月に急逝されました。今後、あまり人に講演依頼をするのは慎もうと思います。

平成 13 年度の研修見学会は、広く会員の希望を募り行き先を決めようということになりました。アンケートの結果は「委員会一任」ばかりで多少がっかりしましたが、見方を変えれば従来の企画に満足していただいていることの表れではないかと思い直しま

した。かくして、7月6日新日鐵の資源リサイクル工場（君津）、東京電力の新エネルギーパーク（富津）、ドイツ村（袖ヶ浦）を見学しました。もちろん、下見も味見もしっかりしましたので前年に勝るとも劣らぬ好評を得ました。

企画委員だけの例会も楽しい催しの一つでした。岡﨑さんのご配慮で平成13年9月に出光興産千葉製油所を見学した後、社員クラブでの懇親会がまた盛り上がりました。会場まで初瀬川さん(東海地質)運転の愛車ベンツに岡﨑さんと一緒に同乗させてもらい、二人ではしゃぎあったのですが、後になってお互いマドンナと二人の世界に浸っていたことを白状して大笑いしたものでした。

千環協・拡大理事会には現役だけではなく往年の理事も参加する麗しい伝統があります。平成13年度は福田さん（JFEテクノリサーチ）のご尽力により、長野県・小海のホテルにて研修会がありました。風光明媚な観光地で翌日のゴルフコンペを楽しみにしていましたが、あいにく前夜からの大雨に一同意気消沈しながらも誰一人として止めようと言い出す勇気のある人もなく、何の因果か悪戦苦闘しながら回ったことも今となっては楽しい一コマです。

日環協・関東支部環境セミナーが鴨川で開催される頃、社内事情により急に理事を退くことになって名取会長以下の理事会各位に大変ご迷惑をかけてしまいました。にもかかわらず、翌年小生が学位を取得した機会には岡﨑さんの呼びかけで盛大な祝賀会を開催していただきました。津上現会長をはじめ、多くの方々から激励と記念品（某マドンナのお見立てによるアルマーニのネクタイ）を贈呈していただいたことが有難く忘れられません。また、平成15年の環境測定技術事例発表会においては「製鋼スラグと腐植物質による磯焼け回復法」について発表する機会を与えていただきました。関係各位に改めて感謝致します。

末筆ながら、お世話になりました千環協と会員各社の皆様の末長いご発展を祈念しています。

※㈱新日化環境エンジニアリングは、2006年10月に環境エンジニアリング㈱と合併し、日鉄環境エンジニアリング㈱となる。

理事就任うら話

社団法人　日本環境測定分析協会
（千環協顧問）岡﨑成美

受話器をとり、「はい、出光興産千葉製油所品質管理課でございます」と私。すると、「アッ、岡﨑さん丁度良かった。環境管理センターの後藤です」。紛れもなく後藤一郎千環協会長（当時、㈱環境管理センター千葉事業所長で後に社長）の声であった。昭和 64 年（１,989 年）２月初旬の午前 10 時頃のことである。続いて、「アノネ～今度、千環協の理事を引き受けて欲しいんです。そして OK の返事を午前中に頂きたいのですよ」。何とも強引な勧誘である。

また、どうして私に白羽の矢が立ったのか不思議である。しかし、尊敬する後藤会長からの要請であるからむげにも断れず、理事の仕事内容を聞き、上司である専務取締役千葉製油所長（創業者一族で後に６代目社長）の所に急いで相談に行った。所長は「それは君、ボランタリーだよ、君の仕事に差し支えなかったら引き受けてあげなさい」と言われた。「当社は証明事業を行っていないので辞退しなさい」との言葉を期待して相談に行ったのであるが、こうなるとサラリーマンはどうすることもできず、後藤会長に OK の返事をした。

それから３期・６年間、企画委員長としての**活躍**ぶりは知る人ぞ知るである。

しかし、後藤会長に続く歴代会長からの評価は低く何時まで経っても平理事据え置き、一向にそろそろ次は副会長（会長はともかく）にとの声がかからない。これでは勤務先の評価と全く同じではないか。コシャクなことに当然のごとく若手の後輩理事が副会長、会長と昇進して行く。こんな人を見る目の会長にこれ以上仕えるのはゴメンだと、３期目の任期満了時に辞表を出した。

と言うのは冗談で、登録はしていても証明事業を行っていない会社が、協会運営の重要な意思決定機関である理事会に席をおくのは問題であると考えたからである。

しかし、２年後に千環協創立 20 周年記念式典が控えていることで、その準備委員会には入って欲しいと要請されて入った。そこでも**私の実力が高く評価され**、

それが終了するとさらにもう一度、理事に復帰することになった。紙数に制限があるのでその辺りの経緯については別の機会に記そう。

ともかく、ボランタリーなことは引き受ける人が少ないが、私は経験して多くの人と巡りあい、学ぶことが多々あり本当に良かったと思う。会員の皆さんには積極的に理事を引き受けて欲しいと思う。

末筆ながら千環協創立30周年を心から祝すと共に、今後の益々の発展を祈る。

“祝”３０周年

中外テクノス㈱
中村　豊

千環協創立３０周年、誠におめでとうございます。一口に３０年と言いますが、その歴史は多くの先人の努力と、関係各位のご指導とご協力の賜物であります。そして現在の千環協を支えている役員の皆様と会員各社の成果であります。ご同慶のいたりです。

平成１８年４月７日に「第３次環境基本計画」が閣議決定され、環境政策の新たな展開が始まりました。地球温暖化・少子化・国際化・などなど、持続可能な社会構築のためのキーワードはたくさん列挙されています。政治問題、経済問題のみならず、あらゆる事象は環境抜きには語れません。正確且つ客観的な情報サービス提供集団としての千環協の社会的役割は益々重要となるでしょう。

環境を生業とする千環協にとって、信頼性の確保は生命線です。
環境分析技術者の技術の証としての分析技能認定制度や、分析機関の格付け制度など、社会的信頼性の確保のために、合理的な制度の検討は日環協や首都圏環協連と連動して検討すべきでありましょう。
我々は増大する環境ビジネスのニーズに答えなければなりません。
これから４０周年、５０周年、いやその先も持続可能な発展を遂げ続ける千環協である事と合わせて会員各社のご盛業を祈りつつ、お祝いの言葉といたします。

「創立３０周年を迎えて思うこと」

（株）住化分析センター
神野　基行

千葉県環境計量協会が創立３０周年を迎えられたこと、まことにおめでとうございます。記念式典においては功労表彰いただき有り難うございます。

私自身、環境分析に携わることになったのも千環協の設立と時を同じくする昭和５１,年でしたので千環協の歴史と共に歩んでいると言っても過言ではありません。３０周年を迎えるにあたっては、様々なことが去来、交錯し感慨深いものがあります。

私は多くの協会活動に参加させていただきましたが､環境分析技術の専門性を生かし、環境保全に寄与するという協会の設立趣旨に鑑み、技術の向上を目的とする為に設けられた技術委員会での活動が主体であったように思います。

理事、技術委員長を仰せつかった四年余の技術委員会の活動が思い出として強く残っております。有能、優秀な技術委員の各位に支えられ大過なく任期を全うすることができましたが、例に違わず、順風の時だけではありませんでした。とりわけ、技術発表会での発表事例の募集をおこなったものの応募が少なく、特定の会員事業所へのお願いで何とか、その発表会の実施に漕ぎ着けたということもありました。今は懐かしく昨日のことのように思い出されます。

技術委員会以外の活動の思い出としては、己の体力の衰えもわきまえず、若者と同等に出来ると思い参加し、見事に玉砕し、その非力を思い知らされた親睦ソフトボール大会。１０余年間、持ち回りとなっていた千環協優勝杯の取り切り大会での優勝で得た我が家の家宝？となっている優勝杯を戴いた親睦ゴルフ大会。

他にも沢山のことが思い出されますが、様々な活動を通じて会員の皆様とお付き合いさせていただき、懇意にさせていただいたことは人生の大きな財産となっています。

最後になりましたが、環境の時代と言われる昨今、環境保全に貢献する環境分析技術の集団としての千葉県環境計量協会が、より一層の発展されること、並びに会員各事業所、各位の益々の繁栄、ご多幸をお祈り申し上げます。

ありがとうございました。

以上

千環協 30 周年記念によせて

㈱住化分析センター
蛭子　聡

千環協 30 周年おめでとうございます。

私が千環協のお手伝いをさせていただいたのは、技術委員長としての１年間だけでした。津上さんが会長に就任されたときに、私も技術委員長をおおせつかり、務めさせていただきました。私はそれまで品質管理の業務に就いていましたので、あまり千環協との接点はありませんでした。したがって、最初は、何をしたらよいのか良くわからず、他の先輩理事の方々にご迷惑を掛けながら、務めさせていただきました。

技術委員会の仕事は技術発表会とクロスチェックが主な仕事です。クロスチェックは千環協の会員の実力向上のため非常に重要な意味があるのですが、資金と人手不足のため、本当にやりたい分析試験項目を選べないという悩みがありました。したがって、過去の例から見ても大体基本的な分析項目、しかも、配付試料が作りやすいもの(ばらつきが無く、安定な試料という意味)になってしまう傾向がありました。この点が技術委員の意見を十分汲み取れず残念に感じたことが記憶に残っています。実際の作業は、技術委員の方が全てやってくれましたので、私は進捗管理だけ気に掛けておけばよいという、非常に楽なものでした。その分、担当の技術委員の方には相当大きな負担をおかけしてわけで、いまだに申し訳なく思っています。

もう一つの技術発表会のほうは、発表者の募集、会場の設定、司会進行と、ほぼ全般にわたって自分で動いて準備をしなければなりませんでした。それなりに忙しかったのですが、大きな行事を一つ終えることができた満足感がありました。ただ、苦労したのは発表者がなかなか集まらないということでした。特定の会員だけが持ち回りで発表をしている感があり、本当の意味での会員の技術交流の場になっていなかったと反省している次第です。

今後の千環協に望むこととして、一言述べさせていただけるならば、会員の皆さんがもっと自覚を持って、会の運営に積極的に参加していただきたいということです。千環協には大きな組織も小さな組織もあると思いますが、千環協にただ参加して情報をもらうだけというところも、残念ながらあるようです。３０周年を迎えたことを期に、千環協が今後もさらに発展していくためには、参加している皆さん全員の努力が大切です。千環協に積極的に参加することで、若い人の教育にもなり、何かしら得るものがきっとあるとおもいます。どうか、もっと大きな観点から千環協への参加意義を考えて、今後とも千環協を支えていって欲しいと思います。

勝手なことを申しましたが、今後ともますます千環協と皆さんの発展を願っております。

千環協 30 周年にあたって（雑感）

JFE テクノリサーチ㈱
福田　文二郎

私事で恐縮ですが、我家が東京空襲で焼け出され、あちこち転々とした後、千葉へ来たのは昭和 24 年頃でした。当時の千葉は、亥鼻の高台から東京湾越しに富士山が遠望でき、煙突と言えば参松の煙突しか無く（たしか芋から水飴を造っていた）、静かでのどかな町でした。まだまだ食料も十分でなく戦後の復興をどうするかが最大の課題の時代です。昭和25～26年頃になると、たまにバスが走るようになり生まれて始めて嗅ぐ排気ガスの臭いもなぜか新鮮に感じたものです。その後埋立地に進出した工場の煙突群からモクモクと吐き出される煙を見て、日本もいよいよ工業国（＝先進国）の仲間入りができるのかと胸が高鳴ったのを覚えています。

その後の急速な工業化と相次ぐ公害の発生はご存知の通りと思います。千環協のメンバー会社も、この時期に発展された会社が多いと思います。当時の皆様のご努力により環境計量測定事業が世間に認知され千環協の発足に至ったのではないかと推察しております。

当時の環境問題は大気や水質の汚染など人の五感でも判るものが多かったと思いますが、最近では PCB、ダイオキシンそしてアスベストなど全く五感では検知できず高度な分析技術を用いないと検出できないものに変わりつつあります。人間の五感は大型コンピューター付きのなかなか優れた検出器官ですが、これらの物質は人類数百万年の歴史からすればつい最近出てきたもので五感が進化する時間が足りないため感知できないのかもしれません。

最近の急速な技術進歩はこのような五感で感知できない新しい物質を次々と生み出しています。最近のナノ物質もその一例でしょう。環境分析業者は、このような新たに生成される物質に対して次々と対応していかなければなりません。そのためには新たな技術開発が必要ですが、開発内容が高度化するにつれて開発コスト負担、リスクが大きくなります。開発技術に対する適正な価格評価あるいは行政との共研・助成等がないと開発を継続的に推し進めることが難しくなりつつあります。このあたりを含め、新しい環境問題を起こさないためにも行政、分析業者、装置メーカー等が一体となって長期的視野に立った活動を進めることが必要で千環協もその一翼を担えればと思っています。

戦後の工業化の先陣である鉄鋼業で会社生活を送り、科学技術発展の恩恵もずいぶん受けていますが、60 を過ぎたこの頃、工業化前の風景、時代を懐かしく想うようになりました。年寄りのノスタルジアでしょうか。

千環協のますますのご発展を祈念いたします。